

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 9 月 29 日現在

機関番号：32664

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2013～2014

課題番号：25884063

研究課題名(和文) 上古中国語の文法化・意味変化の諸相 出土文字資料を中心に

研究課題名(英文) The Study of Grammaticalizations and Semantic Changes in Old Chinese

研究代表者

戸内 俊介 (TONOUCHI, Shunsuke)

二松學舎大學・文学部・講師

研究者番号：70713048

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は上古中国語の機能語が文法化によってどのように成立したのかを、出土・伝世両文献を用いつつ検討したものである。文法化は上古中国語研究の一大関心事であるが、その研究は従来、統語的機能面の検証に重きが置かれてきた。しかし現在、上古の機能語については具体的意味や談話機能も判明しつつあり、このような現状を踏まえ本研究は、これまで看過されがちであった、機能語の具体的な意味や談話機能に着目しつつ、個別の事例として「于」「而」「其」の3つを取り上げ、個々の機能語に対する意味的談話的分析の結果を文法化研究という文脈に取り込みつつ、文法化の事例として一般化を試みた。

研究成果の概要(英文)：This study discussed how functional words in Old Chinese were formed by grammaticalization using excavated and transmitted texts. Grammaticalization is a significant characteristic in Old Chinese studies; however, until now many studies have been limited to syntactic research. The concrete meaning and discourse function of the functional words in Old Chinese are being clarified in recent studies. Based on these conditions, this study investigated Yu (于), Er (而), and Qi (其) as individual samples and tried to generalize the semantic and functional changes of these words as a case of grammaticalization by referring to the results of semantic and discourse analyses on individual functional words.

研究分野：言語学

キーワード：上古中国語(Old Chinese) 文法化(grammaticalization) 出土資料(甲骨文・金文・楚簡) 非現実(irrealis) 于 而 其

1. 研究開始当初の背景

本研究は上古中国語の機能語が文法化によってどのように成立したのかを、出土・伝世両文献を用いつつ検討したものである。

出土文字に関する研究は、中国において最も伝統的な学問の一つであるが、近年、戦国時代の楚国の竹簡、いわゆる楚簡の発見が絶えず続いており、これらの出土資料を積読するため、当時の文字や言語の研究に対する需要も確実に高まっている。ところが我が国の研究状況を見るに、出土資料研究が従来、歴史考古学者によって担われていたこともあり、中国語学を専攻する者の中で資料の扱いや文字の解読に長じた研究者が極めて少ないのが現状である。従って、出土資料を純粋に言語資料として扱った研究を進めている研究者も報告者を含め数えるほどしかない。無論、我が国にも古くは加藤常賢や白川静など文字学の大家と言える研究者はいたが、近年、郭店楚簡(荊門市博物館編《郭店楚墓竹簡》、文物出版社、1998年)、上博楚簡(馬承源主編《上海博物館藏戰國楚竹書》(一)-(九)、上海古籍出版社、2001年-2012年)、清華簡(李學勤主編《清華大學所藏戰國竹簡》(壹)-(伍)、中西書局、2010年-2015年)等重要発見が相次ぎ、研究の状況は大きく様変わりしたため、甲骨文・金文或いは『説文解字』を中心とした過去の文字研究は大きく見直さざるを得なくなった。

以上は古文字に関わる現在の問題点であるが、文法研究に関わる問題点も山積している。過去の文献資料を中心とした上古中国語研究は、文献そのものの成立時期や地点がはっきりしないことから、そこに見える言語現象がどの時代のどの地域に属するものか、不明瞭であることが多かった。ところが、研究材料として扱える出土文字資料が増加し、文字解釈の研究が蓄積されたことから、資料全文の内容も解読できるようになり、それに伴い、時代や地域を特定した文法研究も可能になった。さらに出土資料から上古中国時代の言語を研究するには、文字と文法双方の連携が不可避であるが、古文字と上古中国語文法、双方に深い知識を有し、両分野を併せて包括的に研究を遂行できる人材が、海外を見渡しても多くはないという問題点もあった。

そこで報告者は、上古中国語がいかなる言語だったのかを解明するためには、先秦時代の出土資料の文字に対する研究を行うとともに、その文字学的知識を最大限生かして出土資料を読み解き、そこに描かれている文法に対する研究を進めるべきであるとの着想を得た。同時に報告者は、そのような研究方法を用いることによって、上古中国語における個々の言語の通時的变化の様相がいかなるものであるか、またそのような変化はどのような動機により促されたのかを解明しようとするに至ったのである。

2. 研究の目的

報告者は「上古中国語に見える文法化・意味変化の諸相 出土文字資料を中心に」というテーマを設定し、上古中国語の言語変化、すなわち、ある語が古今を通じてどのような意味機能の変化を辿ったか、を文法化という側面から明らかにすることを目的とした。

従来の文献資料のみを用いた上古中国語研究の問題点は、当該文献の成立自体に議論があることも多く、所与の言語がどの時代どの地域に属するものか、判定が難しかったところにある。しかし、出土資料はその出土地点・年代が限定されており、それゆえそこに見える言語がどの時代のどの地方に属するものか特定しやすい。これにより文献資料による文法研究の弱点は解消され、各時代層を意識した精密な文法化研究が可能となった。

文法化とは、具体的な意味を持つ内容語(content word)が文法的機能を果たす機能語(functional word)に変化する過程を指す。これは近年の中国語研究において一大関心事となっているが、上古中国語研究においても例外ではない。しかしその研究は従来、統語的機能面の検証に重きが置かれてきたように思われる。だが現在上古の機能語については具体的意味や談話機能も判明しつつあり、このような現状を踏まえ本研究は、従来看過されがちであった、機能語の具体的な意味や談話機能に着目した。具体的には、「于」、「而」、「其」を取り上げ、個々の機能語に対する意味的談話的分析の結果を文法化研究という文脈に取り込みつつ、文法化の事例として一般化することを目指した。

3. 研究の方法

(1) 「于」について

「于」については報告者はかつて、戸内 2007 「殷代漢語の時間介詞“于”の文法化プロセスに関する一考察 未来時指向を手がかりに」(『中国語学』254号、pp.164-180、2007年)という論文を発表し、甲骨文中に「于」が動詞から前置詞へ文法化した痕跡が見られること、また時間を導く前置詞「于+時間詞」が未来を導くものであることを実証した上で、このような「于」の「未来時指向」は「于」が「行く」を表す動詞から着点マーカーを経て、時間を導く前置詞に文法化したことにより形成されたとの結論に至った。「于+時間詞」の例は以下の如きである。

壬辰貞：“王于癸巳步。”(『甲骨文合集』32947)

〔壬辰の日に検証した、「王は癸巳の日になってから行軍する」と〕

本研究では上記の研究で多くは言及できなかった新資料《殷墟花園莊東地甲骨》(中國社會科學院考古研究所編著、雲南人民出版社、2003年)も取り入れつつ、自説の妥当性を再検証した。結果としては後述するように、自説の訂正を迫られるという結論が得られた。

(2) 「而」について

「而」については、報告者は2013年度に戸内2013「上古中国語の「NP 而 VP」/「NP₁ 而 NP₂VP」構造における「而」の意味と機能」(『木村先生還暦記念中国語文法論叢』、白帝社、2013年)という論文を発表し、「NP 而 VP」/「NP₁ 而 NP₂VP」構造(以下「NP 而」文と略称する)は、「而」の前項名詞によって喚起される当時の人々の共通知識、或いはフレーム的意味が、後項の表す事象と相反すること、言い換えれば、前項から後項が予想しがたいものであること述べ立て、その意外性を聞き手に伝える構文で、「而」は聞き手に対し注意喚起を促す談話マーカー(discourse marker)として機能しているという結論を提示し、同時にこの種の「而」は前後の論理的相反性を表す逆接の接続詞として「而」に由来していると推測した。「NP 而」文の用例としては以下の如きがあげられる。

州社之樂而天下莫不娛，先王之所以爲自勸也。(上博楚簡『君人者何必安哉・甲本』4-5号簡)

〔州社の樂は(民間の小規模な祭祀であるが)、天下の人々は皆これを楽しんでおり、先王でさえも自らその祭祀に参加し民を激励する手段としていた〕

上記研究では、春秋戦国時代の資料が主たる研究材料であったが、本研究では時代をさらに遡って、秦漢代の出土文献をも研究範囲に入れつつ、自説の再検証を行った。

(3)「其」について

報告者はかつて戸内2011「上古中国語における非現実モダリティマーカーの“其”」(『中国語学』、日本中国語学会、pp.134-153、2011年)という論文を発表し、副詞として機能している「其」について検証した。結論として、春秋戦国時代における副詞の「其」は属格代名詞としての「其」(訓読では「その」と読まれるもの)と連続性がないこと、非現実(irrealis)事態をマーカーする成分であること、またこの非現実性が各種の語用論的意味をもたらしていること(例えば、「其」が一人称主語と共起したときは、話し手が実現困難な事態を実現しようとする意志を表していることや、二人称主語と共起したときは、専ら「君」といった尊称の人称代名詞を主語に取り、聞き手に対する丁寧な要求、謂わばポライトネスを表していることなど)を論証した。例えば、

孰殺子産，吾其與之。(『春秋左氏伝』襄公三十年)

〔子産を殺した者に私は身方しよう〕

曹沫入見曰：“(中略)君其圖之。”(上博楚簡『曹沫之陣』2号簡)

〔曹沫は入って(莊公に)見えて言った、「(中略)君はどうぞこのことをご考慮下さい」と〕

本研究では、時代を遡り、出土資料として西周金文を中心に、伝世文献として『詩経』『書経』を用いながら、西周時代の「其」を検証し、「其」がやはり非現実(irrealis)マーカーであるも、春秋時代と比べるとその含

意に違いがあることを明らかにすることを目指した。

さらに、現状最古の中国語資料と言える甲骨文を用いて、殷代の「其」についても検証した。殷代の「其」については、Serruys, Paul L.-M. *Studies in the Language of the Shang Oracle Inscriptions*(T'oung Pao vol.60, E.J. Brill, 1974)が、望まない事態をマークする成分だと述べており、これは現状最も支持されている説であるが、本研究はこのような現象もまた、「其」が irrealis(非現実)マーカーであることに由来するという点を論証するとともに、Serruys 説の誤りを修正することを目指した。

4. 研究成果

(1)「于」について

前述の戸内2007では甲骨文において動詞の「于」が時間を導く前置詞に文法化していると主張したが、本研究にて再検討した結果、動詞の「于」は甲骨文の段階ですでに存在していない、言い換えれば、殷代では「于」は高度に文法化している、との修正案を提示した。しかし、「于」の文法化後の各種機能の分布(移動の着点を導く機能があること、或いは時間を導く前置詞として専ら未来時に偏ること)や、形態的に「往」と深い関係を持つこと(「于」: 匣母魚部、「往」: 匣母陽部で、その字音は魚部と陽部の対転関係にある)などから、甲骨文に先行する時代では、「于」は間違いなく「行く」という移動動詞義を本義としていたという結論を得た。

また「于」は甲骨文の段階ですでに相当程度の文法化を経ており、多種の機能へと拡張している様相が確認できた。例えば、上記の時間を導く前置詞のほか、着点(goal)、場所(locative)、事物や情報の受容者(recipient)を導く機能である。

(2)「而」について

本研究では「NP 而」文が春秋戦国時代以前には見えないこと、後の秦漢代の出土資料ではなお使用されて続けていることを確認した。また戸内2013で、「NP 而」文は意外性を聞き手に伝える構文で、「而」は聞き手に対し注意喚起を促す談話マーカー(discourse marker)として機能していると述べたが、これは、对人的配慮という点から見れば、「相互主観性(intersubjectivity)的表現」であると言え、ここから「而」が接続詞から他者への配慮に関わる談話マーカーへ相互主観化(intersubjectification)したという可能性を本研究では指摘できた。同時に「而」は本来、前後の論理的相反性を示す逆接接続詞であったが、「NP 而」文においてはこの逆接義が漂白(bleaching)されていると見なせる。漂白にせよ、相互主観化にせよ、文法化に伴う現象であることが言語学の研究成果として夙に指摘されており、従って「而」は上古中国語の段階で、すでに文法化への道を歩み始めていたとの結論が得られた。

(3) 「其」について

まず春秋戦国時代の「其」については上記戸内 2011 から大きな変更はないが、いくつかの例外的表現(「其」が尊称の人称代名詞ではなく、「汝」等賤称の目下を表す人称代名詞と共に起す例)について検証し、例外的に見える表現も irrealis という視点から説明可能であることを確認した。

次に西周時代の「其」について研究を行った。西周時代の「其」もなお irrealis マーカーであると言えるが、その含意するところが春秋戦国時代の「其」と異なっていたことが、「其」の統語的特徴や使用環境に対する検証を通して指摘できた。例えば以下の例では、春秋戦国時代とは異なり、一人称主語である話し手が実現困難な事態の実現を構想している、或いは二人称主語である聞き手に対する話し手からの配慮(ポライトネス)を表しているとは見なせない。

唯武王既克大邑商，則廷告于天：“余其宅兹中或(域)，自之辟民。”(何尊：『殷周金文集成』6014)

〔武王は商に勝った後、天に告げた、「私は中域に居宅し、ここより民を治めよう」と〕

王令紂曰：“馭，淮夷敢伐内國。女其以成周師氏戍于古師。”(泉紂卣：『殷周金文集成』5419)

〔王は紂に命令して言った、「ああ、淮夷は大胆にも内地を討とうしている。おまえは成周の師氏を率いて古師を守護せよ」と〕

これは、言い換えれば、西周 春秋戦国において「其」に意味的拡張があったことを示唆している。本研究では、西周時代の「其」は派生義を持たない、より純粋な非現実モダリティマーカーであったが、春秋戦国時代に至り、非現実性が表す間接性或いは「実現の遠さ」が、語用論的に「実現の困難さ」や聞き手に対する敬避性という意味に推論され、且つ時代を経ると共にこの語用論的意味が習慣化・強化されたため、意味として固定し、その結果、「其」は「実現可能性の低い事態の実現」やポライトネスを意味するようになったと結論づけた。

最後に殷代の「其」であるが、これもなお非現実(irreali)マーカーと見なして大過ない。「其」は下例のように時に望ましくない卜辞に用いられるが、これは非現実性から派生した語用論的意味と考えられる。

己巳卜貞：“亡憂。”

己巳卜貞：“其有憂。”(『甲骨文合集』24664)

〔己巳の日に卜い王が検証した、「(我々に)憂いがない」と。己巳の日に卜い王が検証した、「ひょっとしたら(我々に)憂いがあるかもしれない」と〕

すなわち、不幸に対して人は、疑ってかかりたい、信じたくないという感情を持つものであり、望まない選択肢を非現実領域に置き現実性を低めることで、その実現に対する自らの態度が肯定的ではないということを示し

ているのである。

但し、「其」は常に望ましくないことを表すわけではない。対貞(一つの事柄についての卜辞が亀甲上の中心線を中心に左右対称に配されたもの。肯定形と否定形が対立する形で書かれることが多い)の片方に現れ、且つ占ト主体がコントロールできない事態に関わる占トのときのみである。

一方、占ト主体がコントロールできる事態に関わる占トが対貞を構成し、その片方に「其」が現れるときは、「其」は話し手の意志を表すもので、「望ましくない」ことを表しているわけではないということが判明した。これは前述の Serruys の説を修正するものである。例えば、

庚寅卜賓貞：“今早王其步伐夷。”

庚寅卜賓貞：“今早王勿步伐夷。”

王占曰：“吉。余其伐。其弗伐，不吉。”(『甲骨文合集』6461 正・反)

〔庚寅の日に卜い、賓が検証した、「この朝、(我が)王は夷を討ちに行軍しよう」と。庚寅の日に卜い、賓が検証した、「この朝、(我が)王は夷を討ちに行軍すまい」と。王が占った、「吉である。私は討とう。もし討たねば、不吉だ」と〕

上の例は Serruys 説に従えば、殷王が敵である「夷」を討つことを望んでいなかったことになるが、「王占曰」以下の占辞(王の判断を記した文)は「吉。余其伐。其弗伐，不吉」となっており、これを見る限りにおいては、「夷を討つこと」が望まれていなかったとは考えにくい。やはり「伐」するのが、王にとってすなわち望ましい選択肢であったとの理解が合理的である。

また「其」については、甲骨文の段階では属格代名詞としての機能は見られない。従来、副詞の「其」は代名詞の「其」から成立したという説が有力であったが、古文字資料の分布を見るに、副詞の「其」が代名詞に先行しており、この説には妥当性がない。本研究では、非現実(irrealis)マーカーとしての「其」が、話し手自身の「今、ここ」から遠い領域を指すものであると考えた上で、この「遠距離指示」が代名詞「其」に遠称指示機能をもたらし、これがさらに上古中国語に頻出する「照応(anaphora)」の属格代名詞「其」へと文法化したと推測した。すなわち、「irrealis マーカー(副詞) > 遠称指示 > 照応指示」という文法化プロセスである。

以上(1)~(3)について、従来の計画通り、博士論文(課程博士)としてまとめ、提出することができた(提出機関：東京大学)。さらに、研究協力者と共に、アメリカのミシガン大学に赴き、William H. Baxter 教授と研究交流を行い、自説を発表し意見交換を行った。

(4) その他

中国語において文法化と言え、多くが動詞からの変化である。そこで本研究では、上古中国語の動詞研究にも着手した。具体的には、上古中国語における動詞の取り得る項

(argument)とヴォイス、及び動詞の字音(特に音節頭子音)の関係、謂わば「清濁別義」と動詞のヴォイスの関係についてである。「清濁別義」は動詞の音節初頭子音が無声(清音)か有声(濁音)かでその文法的意味が変わる現象で、唐・陸徳明『經典釈文』という注釈書で体系化されている。例えば「敗」は「X敗Y」(XがYを敗北させる)のとき無声音、「Y敗」(Yが敗北する)のとき有声音であると注されている。例えば、

(中略)“楚師必敗。” 歳子曰：“(晋)敗楚服鄭，於此在矣。”(『春秋左氏伝』宣公十二年)『經典釋文』：敗楚，必邁反。

〔(中略)「楚軍は必ず敗れる」と。歳子は言った、「(晋が)楚を破り、鄭を服従させること、ここにあり」』。『經典釋文』：「敗楚」は必邁の反〕

・(晋)敗楚=X敗Y(XがYを敗北させる)=必邁の反=清音声母

・楚師必敗=Y敗(Yが敗北する)=音注無=濁音声母

しかし近年、上古中国語の動詞には非能格動詞対非対格動詞の対立があるとの研究が提出されており、統語上の目的語の有無で主語の意味役割が使役者が被使役者に変わる動詞を非対格動詞と言うが、上の「敗」はまさにその一例である。統語面のみで動詞の文法的意味を区分できるなら、音節初頭子音の清濁は余分な対立と言わざるを得なくなる。

本研究では上古中国の伝世・出土両文献の非対格動詞の用例、及び『經典釋文』の注釈を調査し、上古音に清濁別義を想定することが妥当か否かを検証することを目指した。現状では、報告者は「清濁別義」がかつて存在したことに懐疑的であり、これについては、2度口頭発表を行った(〔学会発表〕)。

この他、出土資料を扱うための基礎的作業として、訳注を作成(〔雑誌論文〕 及び〔学会発表〕)。また出土資料を言語研究の資料として扱うための入門書として、書籍の執筆も行った(〔図書〕)。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

戸内俊介 「<私の研究>研究の着想に関する回顧録」、『二松學舎大学人文論叢』第93輯、査読無、2014年、88-90

東京大学古文字読書会(戸内俊介、野原将揮、海老根量介、宮島和也) 『清華簡『傳説之命』(下)譯注』、出土資料と漢字文化研究会編『出土文献と秦楚文化』第7号、査読無、2014年、98-120

〔学会発表〕(計 4 件)

東京大学古文字読書会(戸内俊介、野原将揮、海老根量介、宮島和也) 「清華簡(一)『皇門』を読む(下)」、第68回上博楚簡研究

会、「出土資料と漢字文化研究会」(平成26年度科学研究費補助金(基盤研究(B))定例研究会、2014年7月19日 於)日本女子大学 戸内俊介、野原将揮 「「清濁別義」と称される現象について」、2014年度第1回 TB+OC研究集会、2014年7月6日 於)京都大学

東京大学古文字読書会(戸内俊介、野原将揮、海老根量介、宮島和也) 「清華簡(一)『皇門』を読む(上)」、第68回上博楚簡研究会、「出土資料と漢字文化研究会」(平成26年度科学研究費補助金(基盤研究(B))定例研究会 2014年6月28日、於)日本女子大学 戸内俊介 「上古中国語動詞研究概況 能格動詞・対格動詞の対立から」、第1回 TB+OC研究集会、2014年1月26日、於)立教大学

〔図書〕(計 1 件)

戸内俊介 「中国古代文字論 二十一世紀の古文字学」 二松學舎大学文学部中国文学科編『中国学入門 中国古典を学ぶための13章』、2015年、1-20

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

Linguistics for Old Chinese

<https://sites.google.com/site/linguisticsforoldchinese/>

6. 研究組織

(1)研究代表者

戸内 俊介 (TONOUCHI, Shunsuke)

二松学舎大学・文学部・専任講師

研究者番号: 70713048

(2)研究分担者

(3)連携研究者

(4)研究協力者

宮島 和也 (MIYAJIMA, Kazuya)